

春東京祭 東京・春・音楽祭 2026

Spring Festival in Tokyo

ブゾーニ：フィンランド民謡

フェルッチョ・ブゾーニの《フィンランド民謡》は、1888年に作曲されたピアノ連弾曲。第1曲「木こりの歌（Andante）」、第2曲「魚売りの歌（Andantino - Vivace）」の2曲からなる。ヘルシンキ音楽院（現シベリウス・アカデミー）の教授時代に、フィンランドの民族音楽に触発されて書き上げられた。伝統的な旋律を主題としながら、北欧らしい叙情性とブゾーニ特有の技巧的なピアノ書法が融合している。

グリーグ：ノルウェー舞曲より第2番、第4番

エドヴァルド・グリーグが1881年に作曲した《ノルウェー舞曲》は、ノルウェーの民俗音楽をもとにしたピアノ連弾用曲集。全4曲から構成され、いずれもノルウェーの民謡集から着想を得ている。「第2番イ長調（Allegretto tranquillo e grazioso）」は、全4曲の中で最も有名な曲。優雅で牧歌的な旋律を特徴としている。三部形式で、穏やかな主部の間に激しい民謡風の舞曲が挿入される。「第4番ニ短調（Allegro molto）」は、ドラマチックな終曲。低音の不気味で重々しい導入部から始まるが、すぐに活気あふれる農民の舞曲へと変化し、最後は華やかで明快なフィナーレをむかえる。

シベリウス：《ペレアスとメリザンド》より「庭の噴水」「パストラーレ」「間奏曲」

シベリウスの《ペレアスとメリザンド》は、モーリス・メーテルリンクの同名戯曲のために1905年に作曲された劇付随音楽。全9曲からなるが、今回は「庭の噴水」「パストラーレ」「間奏曲」の3曲をお届けする。低音（セコンド）がオーケストラの重厚な持続音やリズムを、高音（プリモ）がイングリッシュホルンや弦楽器の旋律を、それぞれ担当する。

グリーグ：《ペール・ギュント》第1組曲（ピアノ4手版）

《ペール・ギュント》は、グリーグがヘンリック・イプセンの戯曲のために作曲した劇付随音楽。そこから編纂された《ペール・ギュント》組曲には、第1組曲と第2組曲がある。今回演奏されるのは第1組曲で、「朝」「オーセの死」「アニトラの踊り」「山の魔王の宮殿にて」の全4曲からなる。ピアノ4手版では、オーケストラ版の豊かな響きが活かされており、ピアノ連弾の主要レパートリーとして親しまれている。

アルヴェーン：スウェーデン狂詩曲 第1番《夏至の徹夜祭》

スウェーデンを代表する作曲家の一人、ヒュゴ・アルヴェーンの「スウェーデン狂詩曲 第1番《夏至の徹夜祭》」は、1903年に作曲された彼の最も人気のある代表作。複数のスウェーデン民謡の旋律が用いられており、スウェーデンの伝統的な夏至祭の夜、人々が踊りやゲームに興じる様子、静かな夜の情景などが、切れ目なく次々と現れ、多様な音楽的物語を紡ぎ出していく。連弾版では、そうした管弦楽特有の色彩感が繊細かつダイナミックに表現される。